

幕末横浜居留地での英仏軍楽隊野外演奏曲目

(承前)

笠原 潔¹⁾Concert Programs of English and French Military Bands at
Yokohama Settlement in 1860s

(Continued from the Previous Issue)

Kiyoshi KASAHARA

ABSTRACT

English papers which were published in 1860s at Yokohama Settlement often run advertisements of open-air concerts held by English or French military bands. These advertisements tell us that, not only the works of classical composers such as Mozart and Rossini, but also those of more modern and contemporary composers such as Verdi and Johann Strauss II had already been performed at Yokohama in 1860s.

要旨

1859 (安政6) 年の開港後、横浜居留地で刊行された英字新聞には、同居留地で英仏陸海軍軍楽隊が開催した野外演奏会の広告が時折掲載されている。それを通じて、我々は、当日どのような曲目が演奏される予定であったかを知ることができる。本稿では、1863年9月のイギリス海軍ユーリアラス号軍楽隊とフランス陸軍アフリカ軽装歩兵第3大隊軍楽隊の演奏会広告、1865年秋と1866年春のシーズンの英国陸軍第20連隊第2大隊軍楽隊、ならびにそれに続く英国陸軍第9連隊第2大隊軍楽隊の演奏会広告を紹介する。それを通じて、1) 幕末の横浜では、ヴェルディやヨハン・シュトラウスのような同時代の作曲家の作品までもが既に演奏されていたこと、2) オペラの序曲や抜粋がプログラムの多くを占めていたこと、3) 当時ヨーロッパで初演されたばかりの作品が驚くほどの早さで横浜で演奏されていたことが分かる。

V. 英国陸軍第9連隊第2大隊軍楽隊演奏会
広告

第9連隊第2大隊の軍楽隊は、第20連隊第2大隊ほど積極的に演奏会広告を出していない。最初に掲載されたのは、第20連隊から横浜警備を引き継いだ直後に出された、次のような広告である。

The Band of the 9th Regiment, will play on the Bund every Thursday afternoon at 4 30 P. M. until further notice.

W. Morrison, Captain
Paymaster, 2nd 9th Regt.

第9連隊軍楽隊は、次回案内が出るまで、毎週木曜日、午後4時30分から、横浜海岸通りで演奏を行います。

W. モリソン、大尉

主計官、第9連隊第2大隊

(JTDA & YB, Vol. 1 No. 190, 1866/5/18、JT, No. 36, 1866/5/19、JTDA & YB, Vol.1 No. 191, 1866/5/19、JTDA & YB, Vol.1 No. 192, 1866/5/21、JTDA & YB, Vol. 1 No. 193, 1866/5/22、JTDA & YB, Vol. 1 No.194, 1866/5/23、および同second edition)

翌週には、次のような広告を掲載している。

As the Band of the 9th Regiment will be engaged at

¹⁾ 放送大学教授 (「人間の探究」専攻)

the Regatta on Thursday they will play on the Bund at 5 P. M. on Saturday next.

第9連隊軍楽隊は、木曜日にはレガッタ競技に動員されますので、次の土曜日は午後5時から横浜海岸通りで演奏を行います。

(JTDA & YB, Vol. 1 No. 195, 1866/5/24、JTDA & YB, Vol. 1 No. 196, 1866/5/25、JTDA & YB, Vol. 1 No. 197, 1866/5/26)

その直後には、次のような広告も出ている。

The Band of the 9th Regiment, will play on the Bund every Thursday afternoon at 4 30 P. M. until further notice.

第9連隊軍楽隊は、次回案内が出るまで、毎週木曜日、午後4時30分から、横浜海岸通りで演奏を行います。

(JT, No. 37, 1866/5/26、JTDA & YB, Vol. 1 No. 199, 1866/5/29、JTDA & YB, Vol. 1 No. 200, 1866/5/30、JTDA & YB, Vol. 1 No. 201, 1866/5/31、JTDA & YB, Vol. 1 No. 202, 1866/6/1、JTDA & YB, Vol. 1 No. 203, 1866/6/2、JT, Vol. 1 No. 38, 1866/6/2、JTDA & YB, Vol. 1 No. 204, 1866/6/4、JTDA & YB, Vol. 1 No. 205, 1866/6/5)

第9連隊第2大隊の演奏曲目が記されるようになったのは、1866年6月7日(木)の演奏会からである。

The Band of the 9th Regiment, will play on the Bund on Thursday at 5 P. M., and on the same day and at the same hour until further notice.

W. Morrison, Captn. P. B. C.

PROGRAMME

Overture	La Gazza Ladra	Rossini
Selection	Martha	Flotow
Waltz	Elcho	Boulcoupt
Selection	Norme	Bellini
Galop	Night Bell	Clarke

God Save the Queen

A. Vlacco, Band Master

第9連隊軍楽隊は、横浜海岸通りで、木曜日の午後5時から演奏を行います。以後、次回案内があるまで、同じ曜日の同じ時刻に演奏します。

W. モリソン、大尉、P. B. C

プログラム

序曲	《泥棒カササギ》	ロッシーニ
抜粋	《マルタ》	フロトウ
ワルツ	《エルチョ》	ブルクーブ
抜粋	《ノルマ》	ベッリーニ
ギャロップ	《ナイト・ベル》	クラーク

《神よ、女王を守らせたまえ》

A. ヴラッコ、軍楽隊長。

(JTDA & YB, Vol. 1 No. 205, 1866/6/5, second

edition)

1曲目のロッシーニの《泥棒カササギ》は、1817年にミラノで初演。小太鼓の打奏で始まる雄大なその序曲は、日本でもよく知られている。

2曲目のフロトウの歌劇《マルタ》については、先述した。

3曲目の作曲者ならびに作品については、未詳。

4曲目には、これもベッリーニの傑作である歌劇《ノルマ》(1833)の抜粋が演奏されている。広告には、曲名が“NormE”と印刷されている。

5曲目の作曲者クラークが、どのクラークを指すかは未詳。

その数日後からは、次のような広告が、また、出ている。

The Band of the 9th Regiment, will play on the Bund on Thursday at 5 P. M., and on the same day and at the same hour until further notice.

第9連隊軍楽隊は、横浜海岸通りで、木曜日の午後5時から演奏を行います。以後、次回案内が出るまで、同じ曜日の同じ時刻に演奏します。

(JTDA & YB, Vol. 1 No. 209, 1866/6/9、JTDA & YB, Vol. 1 No. 212, 1866/6/14、JTDA & YB, Vol. 1 No. 214, 1866/6/16、JT, No. 40, 1866/6/16、JTDA & YB, Vol. 1 No. 216, 1866/6/19、JTDA & YB, Vol. 1 No. 217, 1866/6/20、JT, No. 41, 1866/6/23、JTDA & YB, Vol. 1 No. 222, 1866/6/26、JT, No. 42, 1866/6/30、JTDA & YB, Vol. 1 No. 225, 1866/6/30)

6月7日の演奏会広告と同文であるが、曲目は記されていない。

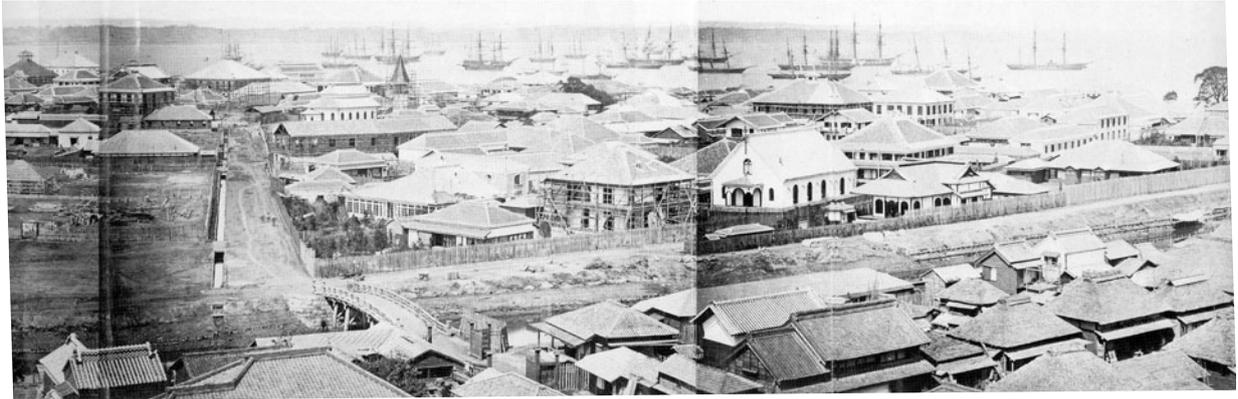
1866年6月21日付の「ジャパン・タイムズ・ディリー・アドヴァータイザー・アンド・ヨコハマ・ベル」紙の初刷りには、次のような広告も出ている。

In addition to playing on the Race Course yesterday and today, we are authorized to state that fine band of H. M.'s 9th Regiment will, by the kind permission of Col. Knox and the Officers of the Regiment, perform the usual weekly selection of pieces on the Bund on Saturday next.

昨日と今日の陸上競技場での演奏に加え、英国陸軍第9連隊の優秀なる軍楽隊は、ノックス大佐と連隊士官の方々のご厚意により、次の土曜日に、横浜海岸通りで、毎週恒例の選び抜いた曲目を演奏することを、謹んでお知らせいたします。

(JTDA & YB, Vol. 1 No. 218, 1866/6/21)

この広告は、1866年6月23日(土)の午後5時から行われる演奏会を予告したもので、同紙の第2刷には、次のような案内が掲載されている。前半は、初刷りと同文なので、後半のプログラムの部分のみ、翻訳する。



ユーリアラス号軍楽隊演奏会（前号参照）開催当時の横浜居留地。1863（文久3）年9月。撮影者不明。7葉綴りのパノラマ写真の右から第2、3葉。山手から撮影。画面手前、左下から右上に流れるのは「堀川」。その手前は「元村」（現在の「元町」）。画面左手で「堀川」に架かるのは「前田橋」。その先に続くのは「元村通り」（現在の「南門通り」）。通りの右側が、「横浜居留地」である。通りの左手には、ようやく建物が建ち始めたばかりの「横浜新田」（現在の「横浜中華街」）が広がる。通りの右側遠方に竣工間近の「横浜天主堂」の鐘楼が、写真第2葉と第3葉の境目（画面が黒くなっているところ）に堀川沿いに建つクライスト・チャーチが見える。横浜沖に停泊中の艦船の中には、ユーリアラス号を旗艦とする、薩摩砲撃から帰還したばかりのイギリス艦隊も含まれているはずである。ユーリアラス号軍楽隊の演奏会が開かれた「海岸通り」は、横浜居留地の建物の蔭になっている。イギリス代理公使ニール大佐からイギリス外務大臣ラッセル卿に宛てた1863年4月27日付の報告書によれば、1863年4月の時点での公使館員・領事館員も含めた横浜居留地の居留民数は228名（イギリス人91名、アメリカ人70名、オランダ人30名、フランス人18名、プロシア人13名、ポルトガル人6名）、そのうち女子は36名であったという（萩原延壽、『旅立ち 遠い崖1 アーネスト・サトウ日記抄』、東京：朝日新聞社〔朝日文庫〕、2007年、248頁）。写真の典拠：横浜開港資料館編、『F. ペアト写真集 2 外国人カメラマンが撮った幕末日本』、東京：明石書店、2006年。

In addition to playing on the Race Course yesterday and today, we are authorized to state that fine band of H. M.'s 9th Regiment will, by the kind permission of Col. Knox and the Officers of the Regiment, perform the usual weekly selection of pieces on the Bund on Saturday next.

PROGRAMME

Overture	William Tell	Rossini
Selection	Robert le Diable	Meyerbeer
Waltz	Twilight Dreams	D'Albert
Selection	Il Barbiere	Rossini
Mazurka	Rosa	Burckhardt
	God Save the Queen	

プログラム

序曲	《ウィリアム・テル》	ロッシーニ
抜粋	《悪魔のロベール》	マイヤーベーア
ワルツ	《薄明時の夢》	ダルベール
抜粋	《セヴィリヤの理髪師》	ロッシーニ
マズルカ	《ローザ》	ブルクハルト
	《神よ、女王を守らせたまえ》	

(JTDA & YB, Vol. 1 No. 218, 1866/6/21, second edition)

1曲目のロッシーニの《ウィリアム・テル》序曲については、再三述べた。

2曲目は、マイヤーベーアの歌劇《悪魔のロベール》（1831）の抜粋である。この作品も、現在の歌劇場のレパートリーに定着している。この曲に関しては、1853年8月にロシアのプチャーチン使節団が長崎に来航した時、使節団員のゴシケヴィチ（後、初代箱館領事）が長崎奉行所検使の馬場五郎左衛門に対して船内

のオルゴールでこの歌劇の第4幕で歌われるカヴァテイーナ「許せよ、許せGrâce, Grâce!」を聞かせることが記録されている。当時、欧米で人気を博していた作品であったことを示すエピソードである。

3曲目に作曲者として名前の挙がっているダルベールに関しては、先述した。

4曲目には、ロッシーニの歌劇《セヴィリヤの理髪師》の抜粋が演奏されている。曲名は、広告では“Il Barbiere”と綴られているが、正しくは“Il Barbiere”である。

5曲目の作曲者ならびに作品については、未詳。

この広告を最後に、第9連隊第2大隊軍楽隊の演奏会広告は姿を消した。

考察

幕末の横浜居留地で行われた英仏軍楽隊の演奏会広告を検討して驚かされる点が三つある。

第1は、現在でも欧米や日本の歌劇場で上演されている名作オペラの序曲や抜粋がすでに演奏されていたことである。現在ではオペラそのものは上演されず、序曲だけが演奏会で取り上げられている作品も含めて紹介すると、以下の通りである。

モーツァルト	《魔笛》
オーベール	《フラ・ディアボロ》《妖精の湖》 《王冠のダイヤモンド》
エロール	《ザンバ》
マイヤーベーア	《悪魔のロベール》《ユグノー教徒》 《アフリカの女》
ロッシーニ	《セヴィリヤの理髪師》《泥棒カサ

作曲家	曲名	初演年	横浜演奏年	間隔
マイヤーベーア	歌劇《アフリカの女》	1865	1865	0
ヨーゼフ・シュトラウス	カドリール《ヘロルド》	1864	1866	2
バルフ	歌劇《ピアンカ》	1860	1865	5
バルフ	歌劇《清教徒の娘》	1861	1866	5
グローヴァー	歌劇《ルイ・ブラス》	1861	1866	5
ヨハン・シュトラウス2世	カドリール《シャンソネッテン》	1861	1866	5
グノー	歌劇《ファウスト》	1859	1865	6
バルフ	歌劇《サタネッラ》	1858	1865	7
ヨーゼフ・シュトラウス	ワルツ《ウィーンっ子たち》	1858	1865	7
ヨーゼフ・シュトラウス	カドリール《ミューズの女神たち》	1858	1865	7

	サギ》《ウィリアム・テル》
ドニゼッティ	《アンナ・ボレーナ》《ベリサリオ》《殉教者たち》《ドン・パスクワレ》
ベッリーニ	《カプレッティ家とモンテッキ家》《ノルマ》
ニコライ	《ウィンザーの陽気な女房たち》
フロトウ	《マルタ》
ヴェルディ	《ナブッコ》《第1回十字軍のロンバルディア人たち》《シチリアの晩祷》
グノー	《ファウスト》

これらの作品群が幕末の横浜ですでに演奏されていたことには、驚くほかない。

それと同時に気付かされるのは、1850年代の西洋のオルゴールに収められた曲目との共通性である。1850年代のオルゴールの曲目を見ると、モーツァルト、オーベール、マイヤーベーア、ロッシーニ、ドニゼッティ、ベッリーニのオペラの序曲や抜粋がかなりの割合を占めており、当時の人気楽曲であったことが分かる。リヒャルト・ヴァーグナー（1813-1883）の作品がまだ登場していない点でも両者は共通している。一方、ヴェルディの作品は、1850年代のオルゴールにはまだ収められていないが、1860年代半ばの横浜ですでに演奏されていた。このあたりが、1850年代のオルゴールに収められた楽曲と1860年代半ばの西洋軍楽隊のレパートリーの相違であろう。

第2は、西洋で初演されたばかりの楽曲が、早々と日本に紹介されている点である。今、初演年が分かる作品で初演後10年に満たないうちに横浜で演奏されたことが判明する曲を拾い上げてみると上に掲げた表のようになる。

この表から、西洋で初演された作品のうちのいくつかは、ほとんど「間髪を置かずに」といってよいほどのタイミングで幕末の横浜で演奏されていることが見て取れよう。現在のところ作曲家や作品の初演年代が未詳な作品の調査が進めば、その数はもっと増えるも

のと思われる。幕末の横浜では、ロンドンやパリやウィーンの音楽界と変わらないほど、最新音楽が演奏されていたのである。

第3は、上記の事実と関連するものであるが、幕末の横浜で取り上げられた作曲家の中には、存命中で、まだ活発な作曲活動が続いていた者がかなり多数いたという事実である。早くに引退したロッシーニ（1792-1868）は別にしても、オーベール（1782-1871）、グングル（1810-1889）、ヴェルディ（1813-1901）、グノー（1818-1893）、スッペ（1819-1895）、ヨハン（1825-1899）とヨーゼフ（1827-1870）のシュトラウス兄弟らがそれであり、バルフ（1808-1870）、ハットン（1808-1886）、ダルベール（1809-1886）、フロトウ（1812-1883）、ボーゼ（1815-1868）、ピーフケ（1815-1884）、グローヴァー（1819-1875）、アルディティ（1822-1903）、ファウスト（1825-1892）、ダニエル・ゴドフリー（1831-1903）らもこれに属する。

それに関連して、もう一つ忘れてならないことは、そうした作曲家の作品で我々がよく知っている曲の中には、まだ作曲されていないものも多数あったという事実である。ヴェルディを例に取れば、《ドン・カルロス》（1867）、《アイダ》（1871）、《オテロ》（1887）、《ファルスタッフ》（1893）といったヴェルディ後期の傑作は、横浜で上記の演奏会が開かれた後に作曲された作品である。ヨハン・シュトラウス2世に至っては、ワルツ《美しく青きドナウ》（1867）、《芸術家の生涯》（1867）、《ウィーンの森の物語》（1868）、《春の声》（1886）、《皇帝円舞曲》（1889）、オペレッタ《こもり》（1874）、《ジプシー男爵》（1885）など、我々がよく知っている彼の作品の大多数は、むしろ、上記の演奏会が横浜で開かれた後に作曲されたものである。

幕末の横浜での英仏軍楽隊の演奏会は、こうした状況の下で開かれた。それは、19世紀半ばの西洋音楽界でのこうした創作活動と同時並行的に進められたものであった。それが幕末横浜の音楽世界であった。

（平成19年10月27日受理）